

# 毛利兵庫(佐伯茶飲話)つて誰?

## 淀殿の弟を探せ!

戸山 恵子

(会員 佐伯市匠南区)

何年間も、なんとなく……? と読みすごしてきた事が年をとるにつけ、やはりおかしい、変だと確信に近いものを感じる事があります。

「佐伯茶飲話」の中に、「毛利兵庫の野心」というタイトルの物語があります。先日(平成17年1月)原文のコピーを読ませていただき、再認識したわけです。

(あらすじ)

毛利兵庫という家老が知行八百石で高政から日田代官を預かっていた。豊臣秀頼の母淀殿(淀川様を淀殿とする)は兵庫には叔母にあたることから、彼女に

願い出て、日田八万石の代官を申し受けて帰り、その紙を高政に見せた。高政はそれをひととがり見て、筆筒の中に入れ、鍵を掛けて知らん顔で奥へ引つ込んでしまった。兵庫は、これは高政を怒らせてしまったと気付き、その夜のうちに大阪に逃げた。兵庫の家来が高政に大阪に逃げた事を訴えると、高政は、磯部大膳に命じて早船で大阪へ上らせた。兵庫が女乗物にて大阪京橋口を通るのを待ち伏せ、大阪屋敷に連れて行き、高政の弟、森吉政に伺いをたてると、首をはねて国元へ持ち帰れと命じられ、佐伯では、家中の侍が登城して首実検に立ち会えとの命があつた、その時、高政は長刀を脇にして、兵庫の首を睨み「己天命逃れざるところなり」と言い、獄門にさらせと命じた。

この事件は、日田地方の支配権をめぐる、いわば、徳川・豊臣の代理戦争のようなもので、信憑性は怪しいのですが、ただ何もなかったら、このような話が生まれ、書き残されるはずはありません。

詳しくは、佐伯史談180号に、宮下良明氏によつ

## ○毛利兵庫の野心

毛利兵庫と云ふ家老、知行八百石にて相勤め候が、高政公日田御代官を御預けなされあり候處、淀川様の御局は、兵庫が爲には叔母にて候ゆへ、是が善く執敵し申せしにや、兵庫日田八萬石の御代官を申受けて罷下り、其折紙を高政公へ御目につかけ候へば、一通り御覽なされて、右の折紙をば其儘御簞笥の中に御入なされ、錠を御して知らぬ躰にてお在候へば、兵庫手持無沙汰の躰にて在りしが、其夜早船に乗り大阪を指して登りたり、兵庫の家來長勘右衛門と申す者、御前に罷出、家來の身分として主人の事を訴へ申し候は、甚だ不義不忠の所爲とは存じ候へども、大守君には替へ奉られずと兵庫が上阪の事を訴へかるに、高政公早速磯部大膳に仰せ付け、早船にて跡を追ひ、登らせ候處、大膳大阪に着し、京橋口に待居り候ひしに、早朝兵庫、女乗物に乗り、罷り通り候を、怪しく思ひ、能々氣をつ見るに、太刀を乗物に立かけたるが、朝日に金鍔の光りうつりて、ピカ／＼と輝くより、否應なしに取て伏せ、繩をかけて大阪の御屋舗に連れ参り候處、折しも森九郎左衛門様御坐なされて、あるゆへ、如何仕る可きやと伺ひたれば、首を刎ねて持下る様にとの仰付けなり、依て首を刎ね、首ばかり持下り候へば、早速御家中の侍共登城いたし首實檢を仰出されたり、その時高政公は牀几に御かゝりなされ、長刀を脇にかひ込みて兵庫が首を御白眼遊ばし、己れ天命逃れざる處なりと仰せられ、首をば獄門にさらし候様にと仰せられたり

て研究されており、友重・高政文書から、年代まで  
絞り込まれておられ、私も宮下氏の年代、つまり、  
慶長5年〜慶長6年（つまり、関ヶ原以後、1・2  
年の間）と仮定して考えてみる事にしました。

さて、本題の？（おかしい）と直感したのは、「淀  
川様の御局は兵庫が為には叔母にて候」という所で  
す。淀川様を淀殿と仮定すると、淀殿と豊臣秀吉と  
の子である秀頼は、兵庫にとつて従兄弟になるから  
です。その兵庫が八百石で高政に仕えていたとい  
うのです。そして、さらなる？（おかしい）は、兵庫  
の親は誰なのかという事です。淀殿の兄弟姉妹の子  
供が兵庫になるからなのです。

歴史上有名な、浅井長政・お市の方との間には、  
二男三女、つまり、茶々、初、お江、万福丸、万寿  
丸がいたとされ、江戸幕府が編纂した「寛政重修諸  
家譜」にこの5人の名がのっています。長女の茶々  
が淀殿。次女の初は高極高次の正室になりましたが、  
実子はいません。三女のお江は、徳川秀忠との間に  
家光以下5人の子供がいますが、男の子は忠長と家  
光の2人です。お江は3度目の結婚でしたから、あ

るいは前夫（羽柴秀勝・佐治一成）との間に子供が  
あったかもしれません。秀勝との間に生まれた女の  
子は淀殿の養女となり公家へ嫁いだというのはわ  
かっていますが…。

淀殿の兄弟2人は浅井家が滅亡した時、万福丸は磔、  
万寿丸は福田寺の僧となっています。だとしたら、  
淀殿の兄弟姉妹は、この4人の他に存在していたと  
いう事になります。浅井長政には、一体何人の子ど  
もがいたんだろう…というのが長年の小さな小さ  
な？でもありました。母親はお市1人とはかぎりま  
せんし…

この？は、ひよんな事からヒントを得ることが出  
来ました。

司馬遼太郎の小説「豊臣家の人々」の中に、こんな  
文章を見つけたのです。「秀吉は大阪城築城後、茶々  
をここへ移し、浅井殿の一族の婦人を呼び寄せてもか  
まわぬ。さらに、男たちも」と言ったとあり、これに  
よってあちこちの隠れ家から浅井一族の者が出てき  
た。落城後、田尾茂右衛門と変名していた浅井政高、  
それに浅井大炊助、妾腹の浅井井頼という者までで

てきた。茶々にとつては、異母弟になるが、茶々は  
その顔すら見るのが今初めてである」の一節です。

何と、茶々（淀殿）に、もう一人の弟の存在が  
あったのです。「浅井井頼」この人物は何者か、淀殿  
の弟であれば、あるいは「兵庫」の父親かもしれない、  
しかし、あくまでも小説は小説なのかと、半ば  
あきらめていた数年間でした。けれど、最近、浅井  
長政の弟の政利の末裔が（尾張藩に仕えていた）明  
治になって編集したという「浅井系統一覽」を目に  
することができました。そこには、先の万福丸・万  
寿丸の他に後2人、長春（喜八郎）と政治（円寿丸）  
が記され、「長春は淀殿と母を同じくす、後の井頼。」  
という文字に出合った時は、「やった！」という気持  
ちでした。さらに、平成6年発行「戦国女系譜」楠  
戸義昭氏の中に「浅井作庵の謎―生きていたお市  
の方の息子」という題を見つけ、作者の楠戸氏から  
浅井作庵のことを調べた丸亀市文化財保護審議会  
長の直井武久氏のことを教えてもらいましたが、す  
でに亡くなられ、そのかわり、直井氏の調べられた  
事が、丸亀市の教育委員会より届きました。（平成16

年秋）：で、「やはりいたんだ、淀殿の弟は子孫を残  
していたんだ」という事がわかったのです。

その資料は直井氏が生涯かけて調査したもので、  
目を通していくうちに淀殿の弟の90年にも及ぶ人生  
が浮かんできました。小谷城落城後、9年後に起  
こった本能寺の変、それに続く山崎の合戦、賤ヶ嶽  
の合戦、そして関ヶ原、大阪冬・夏の陣と生き続け、  
資料に名を残した浅井家の二男である淀殿の弟がい  
たのです。名前も喜八郎・井頼・周防守・政信・政  
賢・長房、そして最後は作庵と名前が変わります。  
おそらく、主家が変わるごとに改名していったもの  
と思われます。普通、木下↓羽柴↓豊臣と出世する  
につれて名字や氏名が変わるのでしょうが、淀殿の  
弟にかぎっていえば、仕えた主人が、浅井家・佐々  
成政・豊臣秀保・増田長盛・生駒一盛、そして豊臣  
家とことごとく滅亡してしまうわけで、悲運としか  
いいようがありません。特に、大阪冬・夏の陣には、  
淀殿に最も近い身内ということもあり、当時の数々  
の資料から彼の名前が出て来ます。

「駿府記」の十月十四日の記には次のように書か

れています。(原書漢文)。

「十四日(略)・、午刻、(家康)浜松着御、京都板倉伊賀守の飛脚到来、其の状に云ふ、大阪の体相替る儀これ無きと雖も、諸牢人いよいよ多く抱え置かる由、別紙注文これを捧ぐ、真田源三郎、これは先年関か原御陣の時、御敵として御勘気を蒙り、数年高野山に引き籠る、秀頼当座の音物として黄金二百枚銀卅貫これを遣し大阪に籠城、若原右京は播磨牢人を召し連れ籠城、浅井周防 是は御母儀(淀殿)の縁者、其の外根来三百騎籠城、何れも金銀多く遣わすに依り、諸牢人馳せ参ぜし事、其の数を知らざるの旨言上す」

これにより浅井周防は、秀頼の召に応じ、既に大阪城に入っていたことがわかります。

大阪城を守る浅井周防の率いる騎馬数については次の二史料があります。

○「大阪陣山口休庵咄」(続々群書類従)

「一浅井周防・(他の八人の名略)・右の衆小身もの也、五騎十騎ヅ、持申候、大野修理二目見いたし、堀裏二被レ居申候、牢人ども少々騎馬の

もの後に抱え申候」

○「長沢聞書」(改定史籍集覧)

「一 大阪衆騎馬百騎より上を扶持致候衆、大野修理、同主馬、真田佐衛門佐、長曾我部、明石掃部、仙石豊前守、森豊前守、木村長門、浅井周防守、後藤又兵衛、右の衆中也

又百騎より下の衆

鈴木田隼人、織田左衛門

其外五十騎三十騎づつ (以下略)」

右の通り浅井周防は百騎以上を率いたひとかどの武将だったようです。

浅井周防の大阪城防備については、参謀本部編纂「日本戦史 大阪役」の「冬役西軍配備表慶長十九年十一月上旬」に、大阪城二の丸の東方、玉造口より青屋口に至る間を隊長として浅井周防守長房・三浦飛彈守義世の二人が兵数三千を率いて配備しており、浅井長房はさらに三の丸東北角より二丁の間の隊長を兼務していた、とあります。

大阪城落城の時、彼の長男（長章）は秀頼と共に  
自害したといわれ、作庵は搜索の厳しい網をかい  
ぐり京都の町中に身を潜め、小浜の実姉、お初を頼  
ります。

浅井家の娘でもあるお初は、息子（忠高、夫の高  
次と側室の間にできた子で、彼女の実子ではない）  
にすまなさを感じながらも、作庵を高極家で守りと  
うすように命じています。

寛永十年（一六三三）、江戸にあつて病床に臥し  
た常高院は、余命幾許もないことを悟り七月二十一  
日遺言状「かきおきの事」を残し、翌八月二十七日  
六十七歳の生涯を閉じます。

「かきおきの事」は若狭守忠高宛で「自分が亡く  
なった後の常高寺のことは委かせる。もし国替に  
なつても寺の続くよう御心添え賜りたい」から始  
まり、十一項目からなっています。その九項目に

「一、さくあん事、なにの御やう（御用）にもたち候ハす  
候て、いま、て御くなう（御用）になし、めいわく申候へ  
とも、いまさらす（おぼか）てられ候ハぬにより、くわふん

のち（編訂）きやうをも御やり候事、我身への御かうり（合）よ  
くとおもひ申候間、いよいよこれさきへハ御ふ  
せう（不世）なる事にて候へとも、いままでのごとく、御  
め（目）かけ候て給り候べく候、たのみれ申候」と述べ  
てあります。

関ヶ原と大阪の陣の三回にわたり、徳川家に弓を  
引いた弟作庵に対し、客分として五百石をも与えて  
くれた息子忠高の苦しい立ち場に礼を述べ自分の亡  
き後も今迄通り頼むと書かれている。徳川家から睨  
まれている弟を持つ常高院が、藩主忠高や家臣らに  
対し肩身の狭い思いをしつつ息を引きとった常高院  
の心情はあわれです。

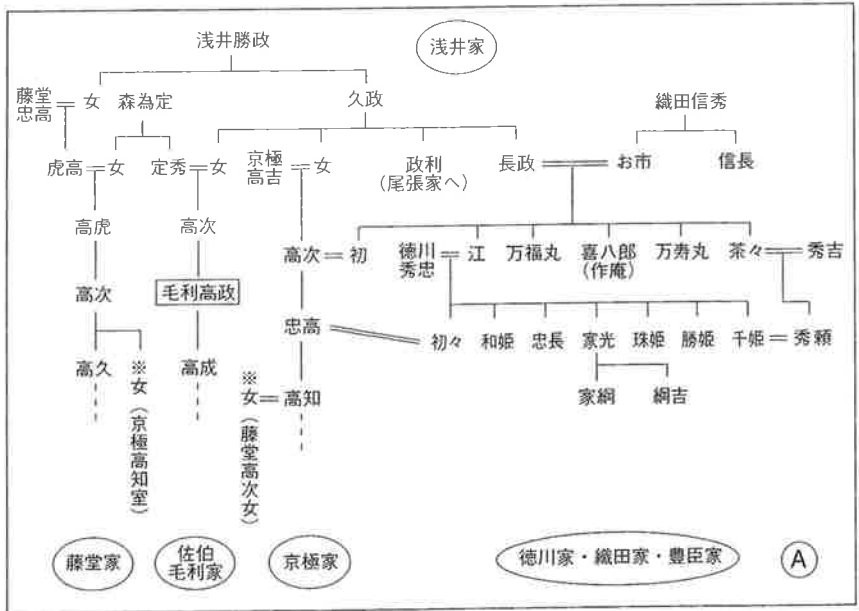
話はだいぶそれてしまいましたが、淀殿の弟、し  
かも同腹の男性は確かに存在したということはおわ  
かったのですが、「毛利兵庫」が、この作庵の子か  
どうかということは、残念ながらわかりませんでし  
た。この時代（現在でもそうでしょうが）母親が同  
じか異なるか、あるいは正室か側室かでその子の立  
場は大きく変わります。大河ドラマ“義経”の中で

の頼朝と義経も同様です。淀殿・お初・お江姉妹と同じく作庵が、父が長政母がお市であったからこそ、毛利兵庫も高政にむかつて豊臣家からもらったお墨付きをヒラヒラ見せることができる立場だったのでしよう。

作庵の子どもは、資料に残るのは男一人（長章）、女一人だけで毛利兵庫の名前は見あたりません。あるいは、大阪城で秀頼らと自害した長章が年齢的にはびつたりなので、毛利兵庫かもしれないし、公の系図では記する事のできない男子（毛利兵庫？）があったのかもしれない。勝者の徳川家に対し、敗者となった豊臣家、その豊臣家に敗れた浅井家に資料が少ないのはあたりまえだし、徳川氏の命令で作らされた系図の資料価値の再検討も必要だと思いました。

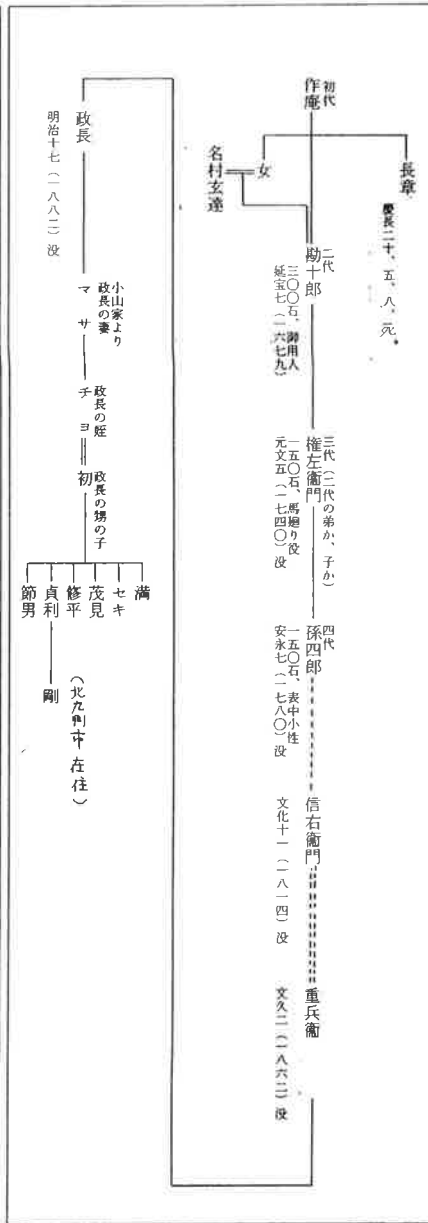
おわりに：

作庵を中心に系図を作ってみると下の①のようになりました。毛利高政は浅井・京極・藤堂家等、近江地方出身の家々とながりがあり、女系をたどれ



----- 浅井作庵 略歴 -----

- 1568年 浅井長政・お市の間に生まれる。姉に、茶々と初。  
兄に万福丸。4番目か？
- 1572年 小谷城落城・父長政の死。4才頃
- 1583年 賤が岳の合戦で秀吉軍として加わる
- 1584年 秀吉の弟、秀長に600石で仕える
- 1594年 増田長盛に3000石で仕える
- 1600年 生駒親正に仕え、西軍として関ヶ原に参戦  
この頃、浅井周防と名乗る
- 1614年 大阪冬・夏の陣で豊臣方に加わるこの頃、浅井長房と名乗る  
長男の長章、豊臣秀頼と共に自害（5月8日）
- 1633年 姉の初（常高院）死67才？  
その際、息子の忠高に書き置きを残す  
この頃には出家して作庵と名乗っている
- 1634年 京極家、小浜から松江へ転封 作庵500石
- 1637年 京極家、松江から竜野へ転封 作庵300石  
この頃から京極作庵と名乗る
- 1654年 京極家、竜野から丸亀へ転封 作庵300石
- 1661年 作庵死。93才？  
5月16日 京極家の菩提寺、玄要寺（丸亀市）に葬られる



浅井作庵家系（浅井剛氏提供）



ばわずかに織田・徳川め豊臣家ともつながっていくのはロマンを感じます。毛利兵庫について、これからもライフワークとして調べていくつもりです。

### 林寅喜氏の書簡

#### 前略

昨日は大変よい話を聞き参考になりました。良く調べていることが分りますが、唯一つ気に成ることがありましたので、僭越ながらお知らせしたいと思います。それは浅井と森の系図の中で、定秀と久政女の夫婦関係についてですが、資料は森秀郷氏の『森一族について』を参考したものと思います。しかし、これは大変な間違いをしていますので以下詳しく説明します。(以下省略)

※7月10日(日) 図書館での発表後、林氏をはじめ3人の方から、あたたかいご指導があり、自分の勉強不足を感じています。ありがとうございます。

又、今回の発表は、淀川様の局を淀殿自身のことと想定して文章をつないでいます。「局」を淀殿に供える女房とも解釈でき、そうなる则と全く異なる展開になるのも、歴史のおもしろいところです。

(10月8日 戸山)

